

縄文人の食生活

はじめに

小竹貝塚は富山市北西部に所在する縄文時代前期（約 6000 年前）の貝塚遺跡で、1955 年頃に発見されました。現在、遺跡の北側には射水平野が広がっていますが、かつては潟（旧放生津潟）が迫り、その潟べりの微高地を利用して集落が形成されました。

小竹貝塚では、酸性土壌の日本列島では腐って残らないことが多い動植物遺存体など有機質の遺物が貝殻から溶け出すカルシウムの中和作用により保護され、現代まで遺存しました。こうした遺物は、動植物の生態系や古環境、人びとの食生活など多くを探ることのできる貴重な情報源であり、小竹貝塚はまさに“6000 年前のタイムカプセル”です。

本展では、新鍛冶川の改修に伴って富山市教育委員会が行った小竹貝塚の工事立会調査のうち、主に 2008 年度調査区の貝層部分から出土した魚類遺存体等に加え、漁具や装身具といった骨角器の展示（写真 1）をとおして、縄文人と魚貝類やイルカ等の海棲哺乳類との関わりを探ります。

魚類遺存体からみた小竹貝塚の漁労活動

小竹貝塚では、新鍛冶川改修工事のほか、北陸新幹線建設工事でも工事立会調査や発掘調査が行われてきました（図 1）。これら 4 つの調査区では魚類遺存体の様相が明らかにされています。特に、北陸新幹線建設に先立って発掘調査が行われた県財団調査区では貝層などの時期を細かく区分できたことから、より詳細な分析が可能となっています。

4 つの調査区の分析結果を比較すると、いずれの調査区でもコイ科やクロダイ属、スズキ属といった淡水や汽水を好む種類が多く出土したことがわかります。このことから、主に約 7200 年前に形成された（ト部ほか 2017）旧放生津潟や周辺の河川で漁労活動を行っていたほか、富山湾に生息する魚類も捕獲していたと考えられます。なお、魚類の骨や歯は漁具や装身具の材料としても活用されました。



写真 1 小竹貝塚から出土した主な骨角製漁具(左)・魚類遺存体(右)

県財団 2010 年度調査区の資料の 90%は、縄文時代前期でも中・後葉（約 6000～5500 年前）、または後葉（約 5500 年前）に属し、末葉（約 5000 年前）は 10%に過ぎません。

他の調査区と組成を比較すると、調査区により貝層の堆積状況は一樣でないことがわかりました。

今後も、調査区ごとの動物遺存体のあり方を詳細に比較することで、日本海側最大級の貝塚を残した集団の食生活に迫ることができると考えられます。

	調査年度	調査主体	調査部分	試料採取場所	層位分類
①	1991年	市	貝塚	貝層の一部	層位不明
②	2008年	市	貝塚	貝層全体	層位不明
③	2009年	県財団	居住域	包含層及び遺構埋土	前期中・後葉、前期後葉、前期末葉に区分
④	2010年	県財団	貝塚	貝層全体	前期中・後葉、前期後葉、前期末葉に区分

※市は富山市教育委員会、県財団は富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所



図 1 新鍛冶川改修・北陸新幹線建設にかかる調査区

シロワニの発見

市教委 2008 年度調査区から、シロワニの歯が出土しました。シロワニは温帯・熱帯海域に生息する暖海性のサメ類で、現在は東シナ海に生息しており、日本海では生息が確認されていません。瀬戸内海に面する岡山市彦崎貝塚からも暖海性魚類（トウカイハマギギ）の骨がまとまって出土しています。これまでは主に貝類の分布の変化から縄文時代前期に地球規模で温暖化したことが指摘されてきましたが、小竹貝塚のシロワニや彦崎貝塚のトウカイハマギギといった魚類の観点からも当時の地球温暖化が示唆されるのです。

主要引用・参考文献(50音順)

- ト部厚志・酒井英男・麻柄一志 2017 「富山湾沿岸地域における潟湖の成立年代—貝塚および低湿地遺跡の成立に関して—」『大境』第 36 号 富山考古学会
- 納屋内高史 2013 「小竹貝塚出土の魚類遺存体(予報)」『富山市考古資料館紀要』第 32 号 富山市考古資料館
- 納屋内高史 2015 「魚類遺存体から見た小竹貝塚」『富山市の遺跡物語』第 16 号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 山崎京美 1993 「小竹貝塚採集の動物遺存体」『富山市考古資料館紀要』第 13 号 富山市考古資料館
- 山崎健・丸山真史・菊地大樹・江田真毅・松崎哲也・三輪みなみ 2014 「脊椎動物遺存体」『小竹貝塚発掘調査報告』第二分冊 自然科学分析編 (公財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

<http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/index.htm>

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター